

## ふくろうの主張

菅 宣子

私の愛する挾間町が、長年の懸案だった「図書館」を創ると本格的に動き出した。そして今年の春、図書館準備室が設立され、幸運にも私は、行政事務から、長年の夢であった司書と言う立場で仕事ができるようになった。

それまで、単なる行政事務屋に徹した日々は、非常にストレスの多い毎日でもあった。

だが現在の行政の中でも、特に小さな町村レベルでの地方公共団体は、その財政的ボリュームからしても専門職を置くことに積極的でない。またそれゆえなのか、専門職を認知する能力に欠けた行政マンが多いのも確かである。

しかしその中で、私の外に新たに司書5名の採用があり、これはとてもありがたいと感じた。

私はいつも、仕事の途中で、“自分の考えをどうすれば上手に他人に伝えられるか”と考える。分かりづらい専門的なことを、行政側に、何らかの根拠に基づき分かりやすく伝え、そして賛同を得るということは、とてもむずかしい。

しかし、それをきっちりと確実に行って行くこと、「だめでもともと」と言う気持ちで、ぶつかって行くことが、大切な第一歩なのだろうと思う。小さなことから、行政側に理解してもらうことを始めなければならないのである。

例えば“単に財政が厳しいから”と言う理由で“図書館が我慢すること”は、図書館の基本理念でもある“知的社会保障の場”を縮小すること、もしくは無くすことになりかねないのである。

今私の置かれている立場は、行政の中の専門職である。その中で、いかに住民サービス、住民本位の図書館にするかは、行政の事務屋さんとの長い戦いのような仕事になる。

「流行」も10年経てば「文化」になる。私の愛する挾間町の図書館が、まちの文化の発信基地として、また住民の知的社会保障の場として、これから息の長い活動を続けられるように自分のできる限り努力をして行きたいと思うこの頃である。

また常に、未熟な自分自身を反省し、より多くのいろいろな意見を充分聞き、そして成長し続けて行きたいと思う。

(すが のぶこ 挾間町図書館準備室)